ミライにつなぐ

本年、8月25日で大河津分水が通水して100周年を迎えます。
燕の「工業」・「農業」・「交通」・「治水」の分野で活躍されている人たちに、
大河津分水がもたらした豊かな恵み、そして未来に向けての想いをお聞きました。

通水が燕の産業の近代化を後押し

㈱青芳　代表取締役会長
青柳 芳郎（あおやぎ よしろう）さん

当時は国内外とも不安定

大河津分水が通水したのは、私が生まれる3年前の1922（大正11）年でした。建設当時の国際情勢は1914（大正3）年に第一次世界大戦が勃発し、戦争による特需からその後の戦後恐慌など景気の変動も著しい時代でした。国内でも1918（大正7）年に米騒動が各地で起きるなど不安定な状況でした。このような時代背景の中で、燕をはじめこの地域で暮らす人たちの多くは、大河津分水の工事に従事し、日当を稼ぐことで生活ができていたと大先輩から聞かされたものです。

産業も近代化

大河津分水の工事が終わると、工事に携わっていた人はやがて金属洋食器製造の担い手となっていったと思います。建設工事が近代化されて機械を用いたように、金属洋食器の製造もそれまでの手仕事から機械による製造へと進化していきました。工場が建ち始め、製品の増産により働き手が必要となりました。実際に私の父親が創業した工場でも何人かの職人が住み込みで働いていました。当時は家族も多く、ごはんの時間になると先に職人、家族は後から食べたことを覚えています。

大河津分水ができて水害が減り、安心して暮らせるようになったことで、大勢の人がものづくりに携わり、活気にあふれ、まち全体が今日までこのように発展し続けてきたと思います。

製品の出荷作業

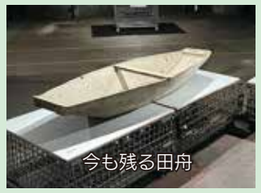
未来に向けて夢を持ち続けてほしい

市の名前と同じツバメのように常に大空に羽ばたく、活気のあるまちであってほしいです。活力もあり、ゆとりもあり、文化的な暮らしができる。特に若い人が夢を持ち続けられる、そんな燕市になってほしいですね。

これからの100年産地を目指して

一つの産地として

私は27代目の農家で、先祖代々の水田を守り続けています。3年に1回は信濃川が氾濫したと言われていますが、今でも作業小屋には水に浸かった稲を刈り取るときに使用した田舟が残っています。当時、この地域の米は県内でも最低の収穫量だったことから、果樹や園芸、養豚などを営むようになったそうです。その後、大河津分水が完成し、水に弱いきゅうりも水害の心配がいらない場所で栽培されるようになり、産地としても定着してきたのだと思います。


今も残る田舟

次世代に残していきたい

通水100周年を迎えるこの機会に、記念として後世に残せるものを作ろうと、昨年日本酒プロジェクトを立ち上げました。そして燕の定番酒を目指して造った純米吟醸酒「ハレトケ」が生まれました。今年も12月に新酒ができる予定です。江戸幕府への最初の請願から通水までの約200年もの間、大河津分水の建設に尽力した先人たちとその恩恵に感謝しながら、たくさんの人に味わってほしいです。

それから農業もものづくりの一つ。とにかく市民の皆さんから楽しんでいただける地元の食材をたくさん作って、提供していきたいです。

一方、農業従事者も高齢化が進み、後継者不足も深刻になっています。1973（昭和48）年に共同出荷が始まった「もとまちきゅうり」の生産農家も8軒にまで減って、この産地を守っていかないといけない思いもあります。

今後は100年産地を目指して挑戦していきたいですね。

ひうら農場 代表　樋浦 幸彦（ひうら ゆきひこ）さん

大河津分水の建設で鉄道網も充実

JR東日本 燕三条駅長
高橋 智義（たかはし ちよし）さん

大河津分水と鉄道整備

新潟県内の鉄道の歴史を調べると、明治時代に信越本線が整備されました。当時は幾度となく信濃川が氾濫していましたが、大河津分水建設の見通しが立った頃の1912（大正元）年8月25日に越後線の吉田～白山駅間が開業。翌年には吉田～柏崎駅間も開業しました。さらに弥彦線も1916（大正5）年から1927（昭和2）年にかけて延伸しながら開業しました。

そして今から40年前の1982（昭和57）年に上越新幹線が大宮駅まで開業。それまで東京までは特急でも5時間を要していましたが、新幹線で2時間程度で行けるようになりました。

このように越後平野に鉄道が整備されたのは信濃川の堤防が切れなくなったおかげだと思います。私も毎日、何気なく信濃川を渡っていますが、歴史を振り返り、今の暮らしが便利になったところを見ると、大河津分水の恩恵を改めて感じますね。

現在の燕三条駅の駅舎

鉄道も節目の年を迎えて

今年は上越新幹線が開業40周年、越後線も開業110周年を迎えます。現在、開業当時の緑色の新幹線車輌を不定期で運行しています。コロナ禍ではありますが、機会がありましたらぜひご乗車いただきたいと思います。

また、これからも安全確保と安定輸送を最優先に、地域の人たちの暮らしや経済活動を支える鉄道としてあり続けたいです。

この地域を水害から守るために

㈱加賀田組 監理技術者
橋本 正人（はしもと まさと）さん

現在、大河津分水を改修中

昨年9月から令和5年3月まで、大河津分水の旧可動堰があった頃からの川筋を現可動堰側に移す改修工事を五千石地内で行っています。これまでの川の流れによって川岸は徐々にえぐられてきていて、洪水時には弱点になる危険性があります。そのため、可動堰から約1キロメートルの箇所に矢板を埋め込みながら川筋を変えていくことで、安全かつ効率的に分水路へ水を流すことができるようになります。

現在は建設機械を使用しますが、通水を目指して工事を開始した頃は、人の手によって掘削して発生した土はトロッコで運ぶという、とても手間のかかる作業でした。今では考えられませんが、当時は度重なる水害から守るためにやるしかなかったと思います。先人たちは苦労されたことでしょう。

技術者の一人として尽力したい

小学生のころ、社会科見学で信濃川大河津資料館を訪れたことがあります。そのときに「横田切れ」や「曽川切れ」などの水害で多くの人が苦しんだことを初めて知りました。この大河津分水なくして、越後平野が米どころとなり、ここまでのまちの発展を遂げることはなかったかもしれません。

私も現在、令和の大改修に携わる立場で護岸整備の監理をしていますが、信濃川流域を水害から守り、この地域の人が安全に暮らせるように尽力したいと思っています。

矢板を埋め込み、川筋を変える大河津分水での工事